

社会的表象理論と社会構成主義(I)^{1),2)}

— W. Wagnerの見解をめぐって —

Social representation theory and social constructionism(I):

Critical comments on W. Wagner's view

矢守 克也*

Katsuya Yamori

I. はじめに

社会的表象理論 (social representation theory) が、モスコビッチ (Moscovici, 1961; 1984) によって提唱されてから40年近くが経過した。しかし、社会心理学界における本理論の評判は芳しくない。なぜか。理由は簡単である。それは、本理論は、個別的な対象・現象をターゲットにした個別理論ではなく、従来の諸理論のほとんどすべてがその大前提として依拠している認識論——主客2元論——、および、方法論——論理実証主義——に抜本的改訂を迫るグラント・セオリーだからである。自らが長年依拠してきた基盤を揺るがしかねない思潮がスムーズに受容されるわけではない。こうして本理論は、非常に否定的な評価を受けるにいたった。もっとも、こうした理解は、やや繊細さを欠いている。正確に記せば、これまで、本理論は否定的に評価されてきたのではなく、端的に理解されなかったか、もしくは、既存の社会心理学 (あるいは、それが拠って立つ認識論) に適合する形に歪曲されてきたのである。

本稿は、このような無理解・曲解が生じる原因の一端は、社会的表象理論の側の不備、正確には、不徹底——social constructionismの立場を徹底しえなかったこと——にあったことを指摘し、あわせて、真の理解へ向けた道のりを示すことを意図したものである。この際、具体的には、近年、社会的表象理論について原理的な再検討、および、実証的な研究の双方を精力的に進めているワグナー (W. Wagner) の著作を議論の出発点とした。

社会的表象理論をめぐって出版されたワグナーの著作は、数多い (末尾の文献リストには、近年の主要なものだけをリストアップした)。そこで、本稿では、社会的表象概念の理解へ向けて理論的な検討を試みた著作、とりわけ、social constructionismとの関係について主題的に検討した最近の3つの著作 (Wagner, 1994; 1996; 1998) をとりあげる。ちょうど2年お

平成11年9月6日原稿受理 *社会学部人間関係学科

きに刊行されたこれら3つの論文は、いずれも、学術雑誌の特集号 (Special Issue) に掲載されたものである。それだけに、3論文とも、社会的表象理論に関する根底的な見直しを試みている。

具体的には、以下の3つの論文である。

第1に、Wagner (1994) 「Fields of research and socio-genesis of social representations: A discussion of criteria and diagnostics」は、「Social Science Information」誌上で企画された「Symposium on Social Representations」という特集の中の一編である (以下、WW94論文)。

第2に、Wagner (1996) 「Queries about social representation and construction」は、「Journal for the Theory of Social Behavior」誌が組んだ特集号「Social Representation Revisited」に掲載されたものである (以下、WW96論文)。

最後のWagner (1998) 「Social representations and beyond: Brute facts, symbolic coping and domesticated worlds」は、「Culture and Psychology」誌の特集号「One Hundred Years of Collective and Social Representations」に掲載された論文である (以下、WW98論文)。

さて、これらの3作を通して、ワーグナーが論述の出発点としているのは、次のことである。

In its conception it [social representation theory:筆者] claims to entail a constructionist view of social life. Moscovici and his collaborators stress this point in all their basic theoretical writings. However, it seems that the social constructionist side of social representation does not always gain the degree of explicit acknowledgement it actually deserves. (WW96, p.95)

すなわち、本来、社会的表象理論とは不可分の関係にあったはずの社会構成主義の主張が忘却ないし脱色されたこと——これが、社会的表象理論をめぐる混乱の源だと言うのである。より正確に記せば、第1に、社会的表象理論陣営内部において、社会構成主義に対する理解が不統一・不徹底であったために、第2に、社会構成主義とは相容れない、主客2元論と論理実証主義に則った認知社会心理学サイド (米国社会心理学界主流) が、社会的表象理論を自らの内部に摂取しようとした際、そこに含まれていた社会構成主義の部分——後論で明らかにするように、実は、これがもっとも重要だったのだが——を削ぎ落として、社会的表象理論を輸入・理解したために、このような事態が生じたのである。

以下、これらのことについて、ワーグナー3部作 (WW94論文, WW96論文, WW98論文) に依拠しながら、具体的に述べていくことにしよう。

II. 社会的表象の社会的起源 (WW94論文)

(1) 「分配～共有的理解」vs「集合～過程的理解」

WW94論文では、冒頭で、社会的表象に関する2つの見解——distributed view (分配～共有的理解)とcollective view (集合～過程的理解)——が並置される。分配～共有的理解は、社会的表象を、「何らかの対象に関する構造化された心的イメージであり、集団・社会を構成する人々によって共有された心的イメージ」と考える。一方、集合～過程的理解は、社会的表象を、「何らかの対象に関する知識が、人々の日常的な相互作用・会話を通して、創造・普及・共有・変容していく社会的過程」と考える。

さしあたって、ワーグナーは、「共有された心的イメージ」と体言止めされる静的な理解(分配～共有的理解)よりも、「…していく社会的過程」という動的な理解、すなわち、社会的表象をプロセスとしてとらえる理解(集合～過程的理解)を推している。なぜなら、前者は、まさしく、認知社会心理学風に曲解されたものであり、これでは、「it [social representation theory: 筆者] introduces a new term to inflate existing terminology」(WW98, p.300)と批判されも仕方のないところだろう。それは、例えば、態度、認知、スキーマなどと呼ばば事足りるのであって、何故、新語を充当せねばならないのか、というわけである。

では、後者のように理解すれば、問題は解決するだろうか。ワーグナー自身、自覚しているように、その見通しは甘いと云わざるを得ない。なぜならば、後者といえども、何らかの心的イメージ(直接的には、知識(knowledge)という用語が使われている)が、個々人のところの中に分配的に所蔵されていると考える点では、前者と大同小異だからである。別言すれば、両者は、「共有」された心的イメージそのものに焦点を当てるか(前者)、それが生成・変容する過程に(も)焦点を当てるか(後者)、といった違いでしかない。実際、既存陣営は、後者の理解をも次のように批判しよう——われわれとて、個人の認知が他者と無関係に独立しているなどとは考えていない。認知は、他者との「相互作用」を通して影響を受け、「共有」されることも多い。

(2) 社会的表象＝「共有」された表象？

社会的表象を、人々のところの中に所蔵されている心的イメージ(心的表象)の「共有」という形式で理解している限り、その形成・変容に関わる社会的過程を強調したところで、認知社会心理学の埒内で十分処理可能である。よって、あえて社会的表象という新概念をもちだす必要はない。これが、目下直面している問題である。

実際、社会的表象を看板に掲げた研究も、その多くが、この「共有」の前提に立って行われている。典型的には、次のような研究である。何らかの対象X(例えば、車椅子の人物)について、社会Aでは、大多数の人が、Xをa(例えば、handicapped person)と認知する。他方、別の社会Bでは、大多数の人が、Xをb(例えば、differently-abled person)と認知する。これらのことが質問紙調査の結果、明らかとなった。よって、社会Aには、Xについて、

社会的表象Xaが存在し、社会Bには、Xについて、別の社会的表象Xbが存在する。この種の研究である。たしかに、このXa、および、Xbをわざわざ社会的表象と呼称する必要はあるまい。(対人)認知、態度、スキーマ等で、十分だろう。

もう一つ、自戒の念をこめて、筆者自身の研究(矢守, 1994)も引き合いに出しておこう。個々人のところに所蔵された地図イメージを、一人一人から引き出し、その共通要素を画像処理によって合成してみせたところで、それは、例えば、複数の「認知地図」あるいは「空間認知スキーマ」(という従来の概念)間の「共有」に関する研究と呼べば済む。ことさらに「社会的表象としてのメンタルマップ」と称する必然性はない。

(3) 表象のメタ的構成への逃避——「reflexive group」「holomorphy」「externality」——

賢明にも、(2)項で指摘した問題点に自覚的であったワグナーは、WW94論文において、社会的表象の「社会的」たるゆえん——正確に表現すれば、表象がことごとく社会的であるゆえん——を、表象、すなわち、心的イメージの「共有」にではなく、別のところに求めようとしている。言い換えれば、ワグナーは、WW94論文のタイトルにも登場する社会的表象の社会的起源(socio-genesis)の根幹を、表象の「共有」とは異なる側面に見いだそうとした。

この意図のもとに、WW94論文で提出された概念が3つある。「reflexive group」「holomorphy」「externality」の3つである。

reflexive group: Discourse and communication that create social representations take place within “reflexive” groups. A reflexive group is understood as a group which is defined by its members, where the members know their affiliation and have criteria available for deciding who else is also a member. (WW94, p.207)

holomorphy: The required public character of collective “thinking” implies that social representations contain meta-information about their reference group. I propose to call this meta-information in social representations “holomorphy”, or “holomorphic” characteristic of representations. (WW94, p.209)

externality: External attributes are attributes which are imprinted onto social representations as a consequence of specific socio-genetic processes. They are external because they do not depend upon the internal structure of a representation, but represent knowledge about the representation and its relation to the group and the members of the group. (WW94, p.213)

これら3つの概念が同じ方向を向いていることは明らかだろう。それは、表象の社会性を表象・認知の内容(の「共有」)にではなく、表象・認知の来歴や属性に求めようとする方向性

である。

喩えて言えば、このようなことである。複数の人間がワープロを操っており、FDやネットワークを通してファイルのやりとりをしているとしよう。このとき、ある時点で、複数の人間（こころ）が、同じ内容のファイル（認知）を共有していたとすれば、そのファイルのことを社会的ファイル（社会的表象）と呼ぶ。これが、「共有」に基づく従来型の社会的表象の理解である。

これに対して、ここでワーグナーが重視しているのは、ファイルの来歴・属性情報である。ファイルには、いつ、だれが、どの時点でそのファイルを開き、書き込みをしたか、どのようなメンバーの間でファイルのやりとりが行われているかを表示する属性情報を付加することができる。ここで、一人一人が、この属性情報に自覚的であるとき、そうした状態を社会的表象が成立した状態と呼ぶ。たとえ、ファイルの中身を「共有」していなくても、ファイルが、複数の人間による内容の作成・更新を受けており、かつ、各人がそのことに自覚的であれば、それは、社会的ファイル（社会的表象）だと考えるのである。反対に、（たまたま）同じ内容のファイルを複数の人間が共有していたとしても、そのファイルに関する属性情報にメンバーが自覚的でなければ、それは社会的表象とは呼ばない。このような理解である。

結論を述べれば、筆者は、この理解は適当ではないと考える。それは、ワーグナー自身、このような理解を記述するにあたって、「meta」あるいは「reflexive」といった用語を使用せざるを得なかった点にもあらわれている。つまり、表象の「中身」の「共有」に依拠する事態からの脱却を企図して、表象の「属性」に焦点を当てたとしても、それは、すぐさま、その「属性」に関する表象・認知の「共有」という問題を誘発するからである。したがって、新しく定義されたかに見えた社会的表象は、表象についての表象（ファイルの属性情報）の「共有」と置換されたに過ぎず、これでは、分析・検討のレベルが変位しただけで、問題の議論——社会的表象は「共有」された表象か？——は、棚上げされていることになる。本項のタイトルに含まれる「逃避」という用語は、このような意味で用いたものである。

(4) 「共有」(share) するとはどういうことか

前節で見たように、WW94論文の時点では、社会的表象理論の再生は遂げられたとはいえない。事実、WW94論文では、ワーグナーは、social construction（社会的構成）を明示的に強調するにはいたっておらず、代わって、社会的表象の「socio-genesis（社会的起源）」という用語が多用されている。そして、そのsocio-genesisの内実を表象のメタ的な構成に求めようとするのは、表象の表象、共有の共有、という屋上屋を重ねるだけである。

筆者の考えでは、問題の核心は、「共有」(share) ということの理解にある。日常的感覚に照らして、何らかの心的なイメージ（あるいは、認知・表象）が複数の人々によって「共有」されていると感じられることは、たしかに多々ある。複数の個人が、それぞれの「内部」に同じものを持っているという実感である。例えば、「その本、取って」「はい、これ」という会話を成立させている2人の人間のそれぞれのこころの内部には、本に関するイメージやスキ-

マが「共有」されているように見える。車椅子の人物をdifferently-abled personとして遇する一群の人々は、そのような認知・態度を、そのころの内部に「共有」しているように見える。あるいは、阪神・淡路大震災について、さまざまに異なる災害イメージが対立している（裏を返せば、それぞれの内輪では、同じ心的イメージが「共有」されている）という言い方がされたりする。

しかし、ほんとうにそうか。今一度立ちどまって、その内実を考えてみる必要がある。ほんとうに、列記したようなイメージ、スキーマ、認知、態度が、ころの内部で「共有」されているだろうか。ごく素朴に考えて、「共有」していると考えられているものは、ころの「外部」にないだろうか。これは、何も難しいことを主張しているのではない。例えば、本を見る時、われわれは、それを「外部」に見るのであって、ころの「内部」に見るのではない。あるいは、ころの「内部」に収納された本のイメージや本のスキーマを見るのではない。differently-abled personや阪神・淡路大震災も、同様である。そのような人物は、われわれの目の前に、つまり、われわれの「外部」の世界に見えるのであり、阪神・淡路大震災も、まずは、われわれのころの「外部」におこった出来事として現れる。

もちろん、認知派は、こう反論するだろう——われわれは、「外部」にあるモノや出来事を、ころが理解するというを説明するために、スキーマや態度といった概念をころの「内部」に、構成概念として仮定しているのだ、と。そのことの意味が分からないわけではない。ただし、それは、研究者が、まさに「構成」したものであって、この世界において、われわれがごく素朴に、一次的に感受する経験ではない。このことだけは、たしかであり、認知派の賛同も得られよう。

議論を元に戻して、当面の結論を引き出しておこう。問題は、「共有」であった。分析的に見て、言い換えれば、二次的に見て、主体のころが、その「内部」に何か——認知、スキーマ、態度など——を「共有」すると見える事態は、実は、「外部」に何かがある、ということなのである。こう言いかえてもよい。「共有」という意識は、何かの「共有」にヒビが入るようになったときに、初めて芽生えるのであり、逆に、「共有」が透徹しきった場面ではけって気づかれることなく、むしろ、単に、「外部」に何かがあると感受される。例えば、本や鉛筆といった基本的なモノ、言語（日本語）、貨幣（円）といった基本的な制度については、その「共有」が頂点に達しているために、何らかの心的イメージの「共有」という議論は生じにくい。他方、「differently-abled person」は、それが、対抗馬である「handicapped person」と並存している、つまり、それが完全に共有されていないという意味で、しばしば、認知、スキーマ、偏見などの認知的な諸概念とよく馴染む。臓器移植、外国人、災害といった、相対的に新奇な対象・出来事に関して、それらに対する態度、イメージといった認知概念がフィットするのも、同じ理屈である。

以上の議論は、要約すれば、社会的表象に関して、ごく単純なただ一つのことを示唆している。それは、社会的表象は、ころの「内部」にではなく「外部」にある、ということである。われわれを悩ましてきた「共有」の問題は、社会的表象をころの「内部」に存在すると誤認

することから生じる、言わば疑似問題であったのだ。「外部」に存在するなら、「共有」の問題など、起きようはずもない。

実際、ワグナー自身、次節でとりあげるWW96論文では、社会的表象理論の提唱者Moscoviciの断片を引用しながら、この立場を鮮明にする。

Social representation is defined as the elaborating of a social object by the community for the purpose of behaving and communicating (Moscovici, 1963; WW96, p.96)

The greater the extent to which a representation of this world is shared with other people, the more this world which is of our making, 'in here', seems to be autonomous, existing in its own, 'out there.' (Moscovici, 1988; WW96, p.97)

看過してはならないのは、最初の引用中の「object」、第2の引用中の「out there」である。ワグナー(WW98, p309など)がしばしば指摘するように、representationという英語(あるいは、表象という日本語)は、これに相当するフランス語の原語(représentation)とは異なり、ここに所蔵されたイメージ・図像という静的かつ内的な意味を強く帯びている。このことも一因となって、社会的表象は、ところの中に所蔵された心的イメージとして理解され、認知派から、これまで取りあげてきたような批判を浴びてきたわけである。しかし、上記の通り、モスコビッチは、はっきりと社会的表象とは、object(対象)であり、out there(そこにある)と定義している。

本稿の冒頭において、社会的表象概念に対する無理解・曲解などと、いくぶん強い表現を用いたのは、この意味においてである。われわれは、これまで、社会的表象に関して、それがどこに存在するかという根本的な問題について、錯誤をおかしてきたと言わざるを得ない。

(5) Interlude³⁾

上に引用した定義に関して、読者は、そこに含まれる“elaborating”、“seems to be”という用語に注目されているかも知れない。そして、以下のように、筆者の議論に反論されることだろう——これらの用語から判断すれば、モスコビッチは、社会的表象を「外部」の存在と考えているのではなく、やはり、「内部」にあると考えているのではないか。少なくとも、「外部」の存在をelaborateしたり、「外部」であるかのように見せる(seem)ためのプロセスを「内部」に想定しているのではないか。このような反論である。

筆者も、この反論は、部分的には正当なものと考えている。それは、後論が示すように、社会的表象が「外部」に存在するという言い方は、実は、誤っているからである。社会的表象は、「内部(認知する主体)」と「外部(認知される対象)」という用語をあえて使用して表現する

ならば、「内部」と「外部」とが未分化な状態から、両者を分類的に現出させる『作用』を示す用語だからである。つまり、社会的表象とは、「内部」、もしくは、「外部」に『ある』と通常考えられている存在そのものを創造する『作用』なのである。よって、「社会的表象とは、どこに『ある』のか」という問い自体が、社会的表象に対する誤解を暗示している。

実際、後述するように（V節）、この点を重視する論者は、social representationの訳語として、「社会的表象」ではなく、文脈に応じて、「社会的表象作用」を用いている。あるいは、その作用の結果として、内部もしくは外部に「ある」かのように現れる「ところ」や「モノ」に言及する場合には、社会的表象作用の「産物」といったフレーズを使用している（杉万，1996，1998；ハッ塚，準備中）。このような用語上の工夫は、一見些細なことに見えるかも知れない。しかし、その背後には、ところやモノがそれ自体で自存するという抜きがたい常識（認知派の前提）に抗して、社会的表象理論の真意を伝達しようとする意図があることを知らねばならない。

さて、では、何故に、社会的表象を、「どこかに『ある』もの」であるかのように論じ、かつ、それを「外部」にあると断言するかのような立論を、これまで試みてきたか。それは、一にかかって、社会的表象に関して現在蔓延している誤解——それを、態度やスキーマといった認知的な諸概念と同列視すること——から生じる混乱や誤解を、とりあえず払拭するためである。その目的で、本来は、社会的表象理論によって、それを否定されるべき主客2元論（「内部＝主体／外部＝対象」の2項図式）にとりあえず立脚する形をとって、社会的表象を位置づけたものである。

参考のために、本論全体の構造を先取りする形で提示しておけば、本論文は3段構えになっており、具体的には以下の如くである。まず、社会的表象というものが、認知する主体の「内部」に存在するという第1の誤解をとりあえず解消するために、社会的表象とは、むしろ、認知される対象であって、主体の「外部」に存在するものである、との主張を行なう。言い換えれば、第1の誤解を払拭するために、このような第2の誤解を（あえて）導入する（I節～II節）。次に、この両方の誤解をともに解消して、社会的表象とは、「外部」に存在する対象そのものではなくて、それをそのようなものとして、主体の前に現出させる「作用」であることを明らかにする（III節～IV節(2)項）。最後に、上の理解になお残存する第3の誤解——主体だけは、その作用に先だって、「内部」に自存すると考える誤解——をも解体し、社会的表象とは、「内部（認知する主体）」と「外部（認知される対象）」とが未分化な状態から、両者を分類的に現出させる「作用」であることを示す（IV節(3)項～V節）。

(6) モノ（物質）の世界はどうなるのか

(4)項の議論に対しては、以下のような、至極当然と思える批判が待ち受けているだろう。「外部」にあると言うなら、それは、モノ（物質）ではないのか。認知系の諸概念は、そのモノ（物質）を、人間（「内部」）がどのように情報処理し、体系的に整理するかを論じている。社会的表象がモノ（物質）だと言うなら、認知派の主張と対立することもないかもしれないが、

そもそも最初から異なる次元のことを問題にしていることにならないか。

この種の反論は、次のように言いかえてもよい。「外部」に本(という社会的表象)がある、「外部」にdifferently-abled person(という社会的表象)がいる。そのように主張したければしてもよいが、それは、認知派にとっては、議論の大前提である。それら「外部」に存在する(人間を含めた)モノを、「内部」がどのように認知するのか、その結果に基づいて、「内部」がいかに「外部」に働きかけるか(行動するか)——これが認知社会心理学の焦点である。それとも、社会的表象(という作用)がなければ、認知派の議論の前提であるモノがきれいさっぱり消えてなくなるとでも言うのか。それでは、まるでオカルトではないか。

実は、議論は、早くも核心に近づいている。「社会的表象がなければ、モノもないのか」。認知派から寄せられるこの批判的反問に対して、「そうですね。たしかに、モノがとりあえずある(いる)ということは認めざるを得ないですね。社会構成主義といえど、その基になるモノ(物質的世界)の存在は認めるのでして…」などと主張を後退させると、早晩、認知派の軍門に下ることになる。上の反問には、明確に、次のように応じなければならない。「そうです。社会的表象がなければ、認知社会心理学が大前提にしているモノの世界が消えます。社会的表象を欠けば、認知派が、『それ』についての態度・スキーマと称する『それ』そのものが消失してしまいます」。本論の冒頭で、社会構成主義の立場を透徹し得なかったことが、社会的表象理論に対する誤解を生んだと述べた。社会的表象理論において、社会構成主義の立場を徹底させるとは、この一見オカルティックな主張を貫くことである。

もっとも、この主張は、きわめて微妙、かつ、繊細に理解されねばならない(そうでないと、本当にオカルトになってしまう)。以下、残された2つの論文(WW96論文とWW98論文)の検討を通して、何故に、また、どのような意味において、先の反問に対する回答がYESたりうるのか(「社会的表象あらずんば、モノもあらず」と言えるのか)について検証していこう。

注

- 1) 本研究は、「平成9年度奈良大学研究助成金」の補助を受けて行われた。また、平成9年9月～平成10年3月まで、奈良大学より教員在外研修(オーストリア)の機会を得て、本稿で検討した著作について、著者であるW. Wagner教授(Johannes-Kepler Universität, Austria)と意見を交わすことができた。記して、感謝申し上げます。
- 2) 本稿(I～II節)は、現在準備中の論文(I～V節)の一部を構成するものである。以下に、論文全体の構成を示しておく。

I. はじめに

II. 社会的表象の社会的起源(WW94論文)

- (1) 「分配～共有的理解」vs「集合～過程的理解」
- (2) 社会的表象＝「共有」された表象?
- (3) 表象のメタ的構成への逃避——「reflexive group」「holomorphy」「externality」
- (4) 「共有」(share)するとはどういうことか
- (5) Interlude
- (6) モノ(物質)の世界はどうなるのか

III. 社会的表象と社会的構成 (WW96論文)

- (1) 3つの問い
- (2) 第1の問い: Does a social representation represent an object? — No, it does not.
- (3) objectとは何か
- (4) somethingの世界
- (5) 第2の問い: Can social representations true or false? — No, they cannot.
- (6) 第3の問い: Is social construction action? — No, it is not.

IV. 社会的表象研究の今後 (WW98論文)

- (1) 社会的表象をどのように理解するか——4つのバージョン
- (2) 歴史認識をめぐって
- (3) 主体そのものの構成——第5の理解 (hyper-strong version) の提起

V. 結語

- 3) 本項は、そのすべてが、ここでの行論に対する注記となっている。社会的表象理論に馴染みのない読者は、当面、これを読み飛ばして(6)項へ進んでほしい。もっとも、社会的表象の概念を真に理解するためには、本項の内容は非常に大切である。

引用文献

- Moscovici, S. (1961) *La psychanalyse son image et son public*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Moscovici, S. (1963) Attitudes and opinions. *Annual Review of Psychology*, 14, 231-260.
- Moscovici, S. (1984) The phenomenon of social representations. (In) R. Farr & S. Moscovici (eds.), *Social representations*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Moscovici, S. (1984) Notes towards a description of social representations. *European Journal of Social Psychology*, 18, 211-150.
- 杉万俊夫 (1996) 集合性に関する理論的メモ 日本グループ・ダイナミック学会第44回大会発表論文集, 26-27.
- 杉万俊夫 (1998) 実践としての人間科学 日本社会心理学会第39回大会 シンポジウム「社会心理学研究方法としてのフィールドワーク」発表資料
- Wagner, W. (1994) Fields of research and socio-genesis of social representations: A discussion of criteria and diagnostics. *Social Science Information*, 33, 199-228.
- Wagner, W. (1996) Queries about social representation and construction. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 26, 95-120.
- Wagner, W. (1998) Social representations and beyond: Brute facts, symbolic coping and domesticated worlds. *Culture and Psychology*, 4, 297-329.
- 矢守克也 (1994) 社会的表象としてのメンタルマップ 実験社会心理学研究, 34, 69-81.
- ハッ塚一郎 (準備中) 社会的表象の理論——社会的構成主義から生成的科学へ

付録：社会的表象理論に関するW. Wagnerの主要著作（引用文献に掲げたものを含む）

- Wagner, W. (1993) Can representation explain social behaviour?: A discussion of social representations as rational systems. *Papers on Social Representations*, 2, 236-249.
- Wagner, W. (1994a) Introduction: Aspects of social representation theory. *Social Science Information*, 33, 155-161.
- Wagner, W. (1994b) Fields of research and socio-genesis of social representations: A discussion of criteria and diagnostics. *Social Science Information*, 33, 199-228.
- Wagner, W. (1994c) The fallacy of misplaced intentionality in social representation research. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 24, 243-266.
- Wagner, W. (1994d) Speaking is acting is representation: Comments on the reply by A. Echebarria. *Papers on Social Representations*, 3, 201-206.
- Wagner, W. (1995a) Social representations, group affiliation, and projection: Knowing the limits of validity. *European Journal of Social Psychology*, 25, 125-139.
- Wagner, W. (1995b) Everyday folk-politics, sensibleness and the explanation of action: An answer to Cranach. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 25, 295-302.
- Wagner, W. (1995c) Description, explanation and method in social representation research. *Papers on Social Representations*, 4, 156-176.
- Wagner, W. (1996a) Introduction to Special Issue. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 26, 93-94.
- Wagner, W. (1996b) Queries about social representation and construction. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 26, 95-120.
- Wagner, W. (1996c) The social representation paradigm. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 247-255.
- Wagner, W. (1997) Local knowledge, social representations, and psychological theory. (In) K. Leung, U. Kim, S. Yamaguchi, & Y. Kashima (eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, Vol. 1. Singapore: Wiley.
- Wagner, W. (1998a) Social representations and beyond: Brute facts, symbolic coping and domesticated worlds. *Culture and Psychology*, 4, 297-329.
- Wagner, W. (1998b) From method to critique: A reply to Vonk and Van Diet. *European Journal of Social Psychology*, 28, 669-673.
- Wagner, W., Elejabarrieta, F., & Lahnsteiner, I. (1995) How the sperm dominates the ovum: Objectification by metaphor in the social representation of conception. *European Journal of Social Psychology*, 25, 671-688.
- Wagner, W., Valencia, J., & Elejabarrieta, F. (1995) Relevance, discourse and "hot" stable core of social representations: A structural analysis of word associations. *British Journal of Social Psychology*, 35, 331-351.
- Wagner, W., Torgersen, H., Seifert, F., Grabner, P., & Lehner, S. (1998) Austria. (In) J. Durant, M. Bauer, & G. Gaskell (eds.), *Biotechnology in the public sphere*. London: Science Museum. 15-28.
- Wagner, W., Duveen, G., Farr, R., Jovchelovitch, S., Lorenzi-Cioldi F., Markova, I., & Rose, D. (1999) Theory and method of social representations. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 95-125.
- Wagner, W. & Yamori, K. (1999) Can culture be a variable?: Dispositional explanation and cultural metrics. (In) T. Sugiman, M. Karasawa, J. Liu, & C. Ward (eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, Vol. 2. Seoul: Kyoyook-Kwahak-Sa.
- Wagner, W. & Kronberger, N. (in press) Killer Tomatoes!: Collective symbolic coping with biotechnology. (In) K. Deaux & G. Philogene (eds.), *Social representation: Introduction and exploration*. Oxford: Blackwell.

Wagner, W. & Kronberger, N. (in press) Discourse and symbolic coping. (In) C. Garnier & M. Rouquette (eds.), *La pensee sociale*. (tentative title)

Summary

本稿は、モスコビッチ (S.Moscovici) によって提唱された社会的表象理論 (social representation theory) は、個別的な対象・現象をターゲットにした個別理論ではなく、従来の諸理論のほとんどすべてがその大前提として依拠している、認識論——主客二元論——、および、方法論——論理実証主義——に抜本的改訂を迫るグラント・セオリーであることを明示し、かつ、そのことを理解する鍵が、本来、本理論と一体のものとして提起された社会構成主義 (social constructionism) の主張を、徹底した形式で導入することにあることを明らかにするものである。

具体的には、近年、社会的表象理論について原理的な再検討、および、実証的な研究の双方を精力的に進めているワーグナー (W.Wagner) の著作を議論のための導きの糸としながら、次の3点について論述した。第1に、社会的表象が、認知する主体の「内部」に存在する心的イメージの一種と考える誤解 (第1の誤解) を解消するために、社会的表象とは、むしろ、認知される対象であって、主体の「外部」に存在するものであるとの主張を行なう。しかし、この主張は、第1の誤解を払拭するために、あえて導入した第2の誤解である。そこで、第2に、この両方の誤解をともに解消して、社会的表象とは、「外部」に存在する対象そのものではなくて、それをそのようなものとして、主体の前に現出させる「作用」であることを明らかにする。最後に、上の理解に残存する第3の誤解——主体だけは、その作用に先だって、「内部」に自存すると考える誤解——をも解体し、社会的表象とは、「内部 (認知する主体)」と「外部 (認知される対象)」とが未分化な状態から、両者を分離的に現出させる「作用」であることを示す。

なお、本稿は、現在準備中の論考の一部を構成するものであり、本稿では、主として、上記の第1の論点について著述した。